

告 辞

卒業生・修了生のみなさん卒業・修了まことにおめでとうございます。今年は、学部、大学院合わせて五三八名が、ここ緑が丘を去られます。私ども教職員は、みなさんとともに過ごしたことを誇りに思います。

卒業にあたって、まず、述べておきたいことがあります。今から四年前、二〇一二年五月に大学構内において本学学生の飲酒死亡事故が発生しました。死亡した学生は未成年者で、皆さんと同じ年に入学した若者でした。大きな社会問題となって、本学の存立を揺るがしかねない事態に至りました。多くの人々のご尽力により、事故そのものは、一応の解決をみて、二〇一四年五月に、体育館前の広場に「誓いの碑」が建てられました。私たちは、その前で、故人のご冥福を改めて祈るとともに、二度とこのような悲劇を起こさないことを誓いました。みなさんは、このことは、忘れないで、ずっと心の中にとどめておいてください。

両親の元を離れて一人暮らしの中で自分を見つめた人、知識や理論を学び新しい世界を発見した人、異文化に触れ自らのアイデンティティを模索した人、人との出会いにより自己成長を成し遂げた人、サークル活動にすべてを捧げた人。

みなさんは、大学で、様々な生き方をし、それぞれの成果を得て卒業されます。大学とは、学びを通じて人と人が出会う場であり、これらすべての人々の拠り所です。人は、自分自身の力で生き方を見つけることはできません。それは、人との出会い、交流のなかで生まれるのです。

もちろん、仕事をもって働くなかでも、それは可能です。しかし、大学の違うところは、全く自由な立場で、自由にものを考える人々の集まりであるというところです。そこでの体験は、何事にも代え難い貴重なものであると私は信じています。大学の起源は、一二・三世紀のヨーロッパで生まれた学生と教師のギルド（組合）にあるとされています。この団体はラテン語で「ユニベルシタス」と呼ばれ、今の「ユニバーシティ」の語源となっていますが、そこでは、学生と教師の自由な交流を通じた学芸の伝承と専門職の育成が行われました。私は、この関係は、現代の大学にも受け継がれている、受け継がれるべきであると思っています。

小樽商科大学は、開学以来、教職員どうし、教職員と学生の自由な交流を大切に実践してきた大学であります。そのことはみなさんも実感しておられると思います。それは「北に一星あり。小なれどその輝光強し」という言葉にも表れています。ご存じのように、これは、もともと、本学の学生新聞（緑丘新聞）のなかで学生が言い出したものを、大学が取り上げて小樽商科大学の標語として使うようになったものです。学生の母校に対する強い誇りが表れたことばです。

卒業式で学生諸君を送る時、学長は、学生諸君が厳しい社会の現実・変化に耐えて、これからの人生を切り開くことを期待して言葉を贈ります。今、どのような言葉がふさわしいのでしょうか。

日本が現在どのような状況にあるのか、みなさんはすでにご感じておられると思います。地域や国が相互に依存・影響しあうグローバリズムが支配する社会、常に国際的な視点で考え行動することが求められる社会です。経済大国としての輝かしい発展を遂げた現在、低成長と人口減少・高齢化、格差問題、特に何よりも忘れてはならない震災からの復興という深刻な国内問題を抱えています。これらの課題は、国全体だけでなく、われわれ個人の生活や人生に直接関わっているのです。

二一世紀は「知識基盤社会」だと言われています。この厄介な社会をより良い方向に導くのは、新しい知識・考え方・思想であり、二一世紀とは、ある人が言うようですが、「知の爆発的な躍進の時代」であります。そして、これからの新しい知識・理論は、あらゆる分野が融合して生まれるものだと思います。そこでは文系・理系もありません。これからの時代を切り開くのは、たった一人の天才ではなく、様々な分野で知識・経験をもった多くの人々の協働でなければなりません。日本は世界に冠たるノーベル賞受賞者の輩出国ですが、最近の日本人のノーベル賞受賞は、山中伸弥教授や梶田隆章教授の例にもみられるように、多くの研究者が力を合わせた結果生まれたものです。

社会に出て職につくと、様々なタイプの人と一緒に仕事をする機会が増えると思いますが、そこで重要なことは、自分の仕事をちゃんとできるかということです。自己の仕事ができ、協働するに値する人間になること、いかにすれば個々の力が大切です。そのためには、知識や理論を学ぶだけでなく、獲得した知識を使って、未知のもの不確実なものに挑戦することが欠かせません。さらには、異なった文化・考え方に対する理解、他者とコミュニケーションする態度、そのなかで自分自身がおかれている位置、アイデンティティーを見いだす力も求められます。

小樽商科大学は、深い専門的知識と外国語も含めた幅広い分野の学修をモットーとする教育を行ってきました。また、それだけでなく、学生諸君に、実践を通じた社会体験、様々な分野で活躍する人との交流の機会を与えることに務めてきました。それによってみなさんが得たものは、これから社会に出て仕事をするなかで身につける能力、遭遇する困難や課題と比較すると、ささやかなものかもしれませんが、大学で、今私が述べたような能力と態度を身につけ、あるいは少なくともその大切さを認識できた、それは意義あることだと思います。重要なことは、これを糧に、卒業後も、修養と自省を怠らないことです。みなさんの今後の人生が有意義なものになることを信じています。

平成二八年三月一五日

小樽商科大学学長 和田健夫